

博士論文要旨

## 『とりかへばや物語』の研究

立命館大学大学院文学研究科

人文学専攻博士課程後期課程

ショウ ショウジュン

ZHUANG JIECHUN

本博士論文は、「女の物語」、「ジェンダーコード」と「日中比較文学」の三つの視点から、『とりかへばや物語』のテキストにおける女性の造形とジェンダーの言説について多角的に考察するものである。

第一章は、平安文学における「女性」に関する言説の生成に注目し、「女の物語」というジャンルにおける、『とりかへばや物語』の継承と開拓を解明する。第一節では平安時代の物語における妊娠の言語表現を追究し、『とりかへばや物語』の妊娠表現は先行物語である『源氏物語』『夜の寝覚』から継承したものであることを明らかにし、その表現の使い分けが物語の展開に果たしている大きな役割を解明する。第二節は、女主人公の婚姻・妊娠・出産に関する言説を、同じ時代の物語である『今昔物語集』などと比較し、家父長制社会に束縛されつつもなお主体的に生きようとする女主人公の人物像を明らかにする。これは『とりかへばや物語』が拓いた女性に関する表現の可能性とし読み取れるものである。

第二章はジュディス・バトラーのジェンダー理論を摂取し、ジェンダーが社会によって構築された一種のパフォーマンスであるとする認識のもと、「男性的」「女性的」と符号化されている言説を一度解体し、当時の歴史的な脈から読み直すことで、女主人公のジェンダーに関する描写を改めて検証する。

社会学研究の成果と比較して、「異性装」を題材とする文学作品に関する比較研究は決して多くはない。特に、『とりかへばや物語』を主に取り上げた研究は、鈴木弘道の「とりかへばや物語と外国文学」と小田桐弘子の「男装女装物語比較考」との二篇のみである。第三章では中国の異性装を題材とする文学作品を取り上げ、日中比較文学の視点から、「異性装」を構成する言説を分析することにより、『とりかへばや物語』の新たな解読の可能性を探りたいと考えている。

平安物語文学の頂点である『源氏物語』は、豊子愷と林文月など有名な翻訳者によって十数種類の中国語訳が存在しているに比べて、「男装」と「女装」という男女双方の越境を語る平安末期物語である『とりかへばや物語』は、中国ではほとんど紹介されていない。一九二九年に出版された謝六逸によって編纂された『日本文学史』に、わずか数行の紹介があるだけである。最後は、最初の試みとして、新編古典文学全集を底本として、巻一前半で一六五頁～一九九頁までの内容を中国語訳した。これからは中国語の全訳を出版したいと考えている。